

序論)

みなさんは、「もうだめだ」って思ったことがあるでしょうか（写真表示）。

仕事のノルマをこなすことができなくて「もうだめだ」。大きな失敗をしてしまっ  
て「もうだめだ」。人間関係において上手に振る舞うことができなくて「もうだ  
めだ」。そして、病気や震災といった自分の手に終えないような不幸な出来事に直  
面して「もうだめだ」。

私達は、色々な時に「もうだめだ」と思い絶望してしまいます。

神様に逆らったことによって、同じイスラエル民族で構成された北イスラエル王  
国が滅び、自分たちもバビロンによって苦しめられ、エルサレムの町が破壊され、  
遠くバビロンの地に連れて行かれたユダヤ人たちもまた、偶像礼拝がはびこるバビ  
ロンの地で、バビロンの人々に見下されるようになった時に「もうだめだ」と思っ  
たのではないのでしょうか。

そのような状況の人達に対して、神様が慰めのことばを投げかけてくださっている  
のが今日の箇所となります。

神様は、どのようなことばで【主】の民を慰めてくださっているのでしょうか。  
みことばによって教えられていきたいと思えます。

### 1) 選びと祝福を与える【主】

まずは1節を読みましょう。

51:1 「義を追い求める者、【主】を尋ね求める者よ、わたしに聞け。あなたがたが  
切り出された岩、掘り出された穴に目を留めよ。

神様は「義を追い求める者」「【主】を尋ね求める者」に呼びかけておられます。

「義を追い求める」とは単純に正義を求めているだけではなくて、罪によって切り  
離されてしまった神様との関係を回復し、神様と一つになって歩むことを求める人  
のことを指します。この箇所において「義」とは「【主】なる神様」のことです。

なぜこの人は義を求め、【主】なる神様を求めているのでしょうか。それは、  
彼らがバビロン捕囚によって神様に見捨てられ、神様と切り離されているように感  
じているからです。

実際には前回のメッセージでも確認したように神様はイスラエルを見捨てておられませんでした。でも、バビロン捕囚という厳しい現実を直視したとき、彼らは【主】との断絶を感じずにはいられなかったのです。だから、義を求め、【主】を求めていた。

さて、そんな絶望とも思える状況にある神の民に対して、【主】はなんと言われているかという、「あなたがたが切り出された岩、掘り出された穴に目を留めよ」と言われています。これは、自分たちのルーツに目を向けてみなさい。と言う神様からのメッセージです。

みなさん、イスラエルのルーツとは何でしょうか。それはアブラハムであり、アブラハムの妻サラのことです。だから、2節に

**51:2a** あなたがたの父アブラハムと、あなたがたを産んだサラのことを考えてみよ。

といわれています。

そして、神様はこのようにアブラハムとサラのことを思い出させた後、

**51:2b** わたしが彼一人を呼び出し、彼を祝福し、彼を増やしたのだ。

と宣言されている。これはどうゆうことかという、イスラエルは確かにアブラハムとサラから生み出されていったのですが、彼らを神の民イスラエルにしたのは、神様が、アブラハムを呼び出し、神様がアブラハムを祝福し、神様がアブラハムの子孫を増やしたからです。

みなさん、実際にアブラハムやサラのことを思い出してみましよう。アブラハムやサラは何かとても素晴らしいことをしたから神の民にされたのでしょうか？ いえ、アブラハムは元々メソポタミアの偶像礼拝の文化の中で育った異教の民でした。また、サラも年老いて自分が子どもを生むなんて信じ切ることが出来なかった人でした。でも、神様がアブラハムを選び、不妊の女であるサラにいのちを与えたから、彼らは約束の子イサクを手に入れることができ、様々な問題を乗り越えて、イスラエルの父祖になることができたのです。

【主】なる神様は人の行いや業によって祝福を与えたり、救いを与えたりする方ではなく、神様の一方的な選びと恵みによってイスラエルを神の民にし、私達を神の

民にしてください。だから、神様は言われます。3節

**51:3** まことに、【主】はシオンを慰め、そのすべての廃墟を慰めて、その荒野をエデンのようにし、その砂漠を【主】の園のようにする。そこには楽しみと喜びがあり、感謝と歌声がある。

「慰め」と訳されている言葉は「あわれみ」と訳すこともできます。一方的にアブラハムたちを選び、不妊のサラを祝福してイスラエル民族を作ってくださった【主】は、今度も一方的な恵みによってイスラエルをあわれみ、荒野のような状態になっているイスラエルを、エデンの園のように恵みあふれるところ、楽しみと喜びがあり、感謝と歌声が溢れるところにしてくださいなのです。

これは単純にバビロンから解放してくださるということではなくって、それ以上の罪によって切り離された神様との関係の回復を、義を求め、【主】を求めていた人達に神の国を与えてくださるという神様からの恵みの約束です。みなさん、【主】の救い、【主】の義は恵みによって与えられるのです。

だから、エペソ人への手紙でパウロがこのように言っています。

#### エペソ人への手紙

**2:3** 私たちもみな、不従順の子らの中にあって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

**2:4** しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、

**2:5** 背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。

みなさん、【主】は一方的な恵みによって私達を選び、恵みによって私達と【主】との関係を回復させてくださり、エデンの園のような神の国を私達の内に作り上げてくださり、「もうだめだ」と思うような時も、楽しみと喜び、感謝と賛美で溢れるようにしてくださいなお方なのです。これが神様の義であり、神様の救いです。

## 2) 【主】の教えによって諸国を正しくさばき、義と救いを与える【主】

では、神様はどのようにしてこの救いを実行してくださるのでしょうか。それは【主】のおしえをもって世界をさばき、世界に光を与えることによってです。4節を読んでみましょう。

51:4 わたしの民よ、わたしに心を留めよ。わたしの国民よ、わたしに耳を傾けよ。おしえはわたしのもとから出て、わたしが、わたしのさばきを諸国の民の光と定めるからだ。

注目していただきたいのは、「おしえはわたしのもとから出て、わたしが、わたしのさばきを諸国の民の光と定めるからだ。」と語られている箇所です。ここに神様が荒野をエデンの園にするための計画が語られています。具体的な神様の計画は2つ

- ① おしえを神様のところから私達のところへ送ってくださる
- ② その教えによる神様のさばきを世界の光とする

ということです。これはどうゆうことでしょうか。「おしえ」と訳されていることは「律法」と訳することができる言葉が使われています。だから、神様が律法を世界中に広げて、その律法によるさばきを世界の光にすると、そのように理解することもできるのですが、ここでいう律法とは、イスラエルに与えられた石の板に書かれた律法のことではなく、神の民すべての人の心に聖霊様によって書き加えられる律法のことであり、【主】イエスキリストの教えことです。パウロはこのように言っています。

## Ⅱ コリント 3:3

あなたがたが、私たちの奉仕の結果としてのキリストの手紙であることは、明らかです。それは、墨によってではなく生ける神の御霊によって、石の板にではなく人の心の板に書き記されたものです。

私達、【主】に救われた者はキリストの教えを持っています。そして、そのキリストのおしえは私達の心にどのように書かれているかということ、御霊なる聖霊によって私達の心に書かれたのです。神様はこのキリストのおしえによって、私達に光を与え、エデンの園のような喜び溢れる神の国を私達の中に作り上げてくださいま

す。  
そして、その結果としてどうなるかということ、同じくⅡコリント3章18節にはこのように書かれています。

## Ⅱコリント 3:18

私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

わかるでしょうか。(イザヤ 51:4 を表示)

神様はキリストという【主】の教えを送り出し、聖霊さまによってその教えを私達の心に刻み、それによって正しい裁きをなし、エデンの園のような喜び溢れた神の国を私達に与えてくださり、光、輝かせてくださるのです。

だから、世界はキリストの到来に希望を抱き、期待をするのです。  
イザヤ書51章5節にこのように書かれている通りです。

**51:5** わたしの義は近く、わたしの救いは現れた。わたしの腕は諸国の民をさばく。島々はわたしを待ち望み、わたしの腕に期待をかける。

「わたしの腕」というのはキリストのことです。キリストこそが、神様の計画によって用意されていた【主】の義であり、【主】の救いであり、私達の望みなのです。

### 3) 世は滅びても耐えることのない【主】の義と救い

そして、神様はこの義と救いは決して失われることがないと約束してくださっています。6節を読んでみましょう。

**51:6** 目を天に上げよ。また、下の地を見よ。まことに、天は煙のように消え失せ、地も衣のように古びて、その上に住む者はブヨのように死ぬ。しかし、わたしの救いはとこしえに続き、わたしの義は絶えることがない。

この世のものはいつか消え失せてしまいます。

ヨハネの黙示録には世の終わりの出来事がかかれていますけども、現代科学も、地

球がいつか滅びることを説明しています。それは地球温暖化の先の破滅かもしれないし、戦争の結果なのか、地球という惑星の寿命なのかはわかりませんが、いずれにしても、聖書的にも科学的にもこの世のものはいつか絶対滅びてしまうことは断言されています。でも神様は言われます。

「しかし、わたしの救いはとこしえに続き、わたしの義は絶えることがない。」とみなさん、神様の救いと義は決して失われることがないのです。

イエス様も言われました。

### マタイ 24:35

天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。

また、ヨハネもこのように言っています。

### I ヨハネ 2:17

世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。

みなさん、【主】のみことば、【主】の義、【主】の救いは例え世界が滅んでも決して失われることがないのです。だから、私達はこの世の人達の攻撃を恐れる必要がありません。イザヤ書に戻ります。イザヤ書5 1章7節、8節

51:7 義を知る者たちよ、わたしに聞け。心にわたしのおしえを持つ民よ、人のそしりを恐れるな。彼らの、ののしりにくじけるな。

51:8 まことに、シミが彼らを衣のように食い尽くし、虫が彼らを羊毛のように食い尽くす。しかし、わたしの義はとこしえに続き、わたしの救いは代々にわたる。」

みなさん、この世の人達は私達の信仰や私達がキリストに従って生きようとすることをバカにしたり、見下したり、時には愚か者だと攻撃してきます。

でも、そういった世の人たちのことばを恐れる必要はないのです。

なぜならば、そういった人達が頼りにしているこの世の知恵とか、科学とか、この世の富、そして、そういった人達自身もいずれ失われてしまうものだからです。

それに比べて、私達が信じている【主】のことばと、その義は永遠に失われないか

らです。だから、私達はこの世の人達のことばを恐れる必要はありません。

これは旧約聖書にも、新約聖書にも書かれている神様の約束であり、保証です。私達は決して失われない義と救いを持っている。これを信じる時、私達は「もうだめだ」という恐れに勝利をすることができます。

#### 4) 義を求める者の叫びと信仰

しかし、そうはいつでも、眼の前の厳しい現実。辛く、苦しい現実と直面するとき、「神様、早く救ってください」「早く神様の義を示してください」と言いたくなることもあるのではないのでしょうか。

9節から11節のことばは、正確には誰のことばなのか不明ですが、恐らくイザヤが民を代表して叫んでいる言葉ではないかと言われています。

【主】の救いの約束を直接聞いているイザヤでさえ、【主】の前にこのように叫んでいます。9節、10節を読んでみましょう。

**51:9** 目覚めよ、目覚めよ。力をまとえ、【主】の御腕よ。目覚めよ。昔の日、いにしえの代のように。ラハブを切り刻み、竜を刺し殺したのは、あなたではないか。

**51:10** 海を、大いなる淵の水を干上がらせ、海の底に道を設けて、贖われた人々を通るようにしたのは、あなたではないか。

この人は【主】に向かって、「目覚めよ。目覚めよ。」と命じています。

人間が神様に向かって目覚めよと命じるって、ずいぶん恐れ多いことではないのでしょうか。

「目覚めよ」というのは、「奮い立って」とか、「立ち上がって」という意味です。この人は【主】の救いの声を聞きつつも、厳しい現実があるその状況で、『今、その救いのために「立ち上がれ!」と神様に叫んでいます。』

ただし、これは不信仰のゆえに叫んでいるわけじゃなくて、【主】は過去に既に救いの御業をなされていたから、それを信じるゆえの叫びです。

9節の「ラハブを切り刻み、竜を刺し殺したのは、あなたではないか。」というのは、ラハブがエジプトのことをしめし、竜がエジプトの王ファラオのことをしめています。【主】はイスラエルを救い出すためにエジプトを倒し、エジプトの王ファラオを倒されました。10節の「海を、大いなる淵の水を干上がらせ、海の底に道を設けて、贖われた人々を通るようにしたのは、あなたではないか。」という

のも同じで、神様が出エジプトの時に海を開いてイスラエルを救い出してくださったことを指しています。

「【主】よ。あなたは出エジプトの時にエジプトを倒し、救いの道を開いてくださったのだから、今、私の救いのために奮い立ってください」とこの人は言っているのです。

みなさん、神様の救いの約束、救いの計画を教えてもらっても、目の前の現実が厳しい状況の時、今、助けてください。救ってください。と私達は叫びたくなります。聖書に書かれている救い。出エジプトの救いや、イエス様の十字架の救いを信じているからこそ、今、奮い立って私達を救ってくださいと叫びたくなるのです。

みなさん、その時どうしたらいいのでしょうか。その時は叫んでいいのです。

本来、【主】に対して「目覚めよ、目覚めよ。ちからをまとえ」なんて命令するのは不遜なことであり、あってはいけないことです。

でも、神様はこのような叫びを聖書の中で語らせている。なぜでしょうか。

【主】を信じ、【主】に救いを求め、【主】の義を追い求める者は、このように叫んで良い権利を与えられているからです。

信じているからこそ、苦しみ求める叫びを、私達は素直に叫んでいいのです。

そして、その上で、私達は【主】への信仰を告白します。11節を読みましょう。

**51:11** 【主】に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンに入り、その頭には、とこしえの喜びを戴く。楽しみと喜びがついて来て、悲しみと嘆きは逃げ去る。

## 結論)

みなさん、みなさんは【主】の義を求めておられるでしょうか。

【主】を探し求めておられるでしょうか。

今年、大きな被害を受けた能登は、今度は大雨によって被害を受けたそうです。あのように大きな被害を受け続けたのならば、「もうだめだ」と叫ばずにはいられなかったのではないのでしょうか。

私達は「もうだめだ」と叫びたくなる現実に直面することがあります。特に自分の罪に押しつぶされそうになったり、神様に見捨てられたように思える厳しい状況



に陥ったりするときに、【主】を求め、【主】の救いを求めたくなります。

そんな、私達に対して【主】は言われます。「アブラハムやサラを選んで一方的な恵みを与えたように、あなたたちのことも憐れんで、荒野をエデンに、砂漠を【主】の園にするような恵み、あなた達に神の国を与える恵みを与えてあげる。そのためにキリストを送り、【主】の教えを伝えさせ、聖霊による救いを与えてくれたのだ」と。

そして、「この【主】の義と救いは永遠に失われない」と・・・。

だから、みなさん、【主】の義と救いに望みを抱き、希望を持ちましょう。

もちろん、厳しい状況にあるときは叫びたくもなります。その時は叫んでください。「【主】を今、救ってください。今、御業をなしてください。」と・・・。

そして、その上で【主】の救いを信じ信仰告白をしましょう。

**51:11** 【主】に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンに入り、その頭には、とこしえの喜びを戴く。楽しみと喜びがついて来て、悲しみと嘆きは逃げ去る。

このことばを私達の信仰の確信にしたいと思います。

最後にもう一度、【主】の救いの約束に目を向けて終わりたいと思います。

**51:4** わたしの民よ、わたしに心を留めよ。わたしの国民よ、わたしに耳を傾けよ。おしえはわたしのもとから出て、わたしが、わたしのさばきを諸国の民の光と定めるからだ。

お祈りします。